

**立教大学学術推進特別重点資金 (立教 S F R)**  
**大学院学生研究**  
**2015年度研究成果報告書**

<b>研究科名</b>	立教大学大学院	文学 研究科	ドイツ文学 専攻
<b>研究代表者</b> (2016年3月現在のものを記入)	在籍研究科・専攻・学年		氏名
	文学研究科ドイツ文学専攻 博士課程後期課程1年		宮島 章子 印
<b>指導教員</b>	所属・職名		氏名
	立教大学文学部・教授		井出 万秀 印
<b>自然・人文・社会の別</b>	自然 ・ <input type="checkbox"/> 人文 <input checked="" type="checkbox"/> ・ 社会	<b>個人・共同の別</b>	<input type="checkbox"/> 個人 <input checked="" type="checkbox"/> 共同 名
<b>研究課題</b>	ドイツ語史におけるスイスドイツ語——その思想的・文化的背景——		
<b>研究組織</b> (研究代表者・共同研究者) ※2016年3月現在のものを記入	在籍研究科・専攻・学年		氏名
	文学研究科ドイツ文学専攻 博士課程後期課程1年		宮島 章子
<b>研究期間</b>	2015 年度		
<b>研究経費</b> (1円単位)	(支出金額) 200,000円 / (採択金額) 200,000円		

**研究の概要** (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究では、スイスドイツ語がドイツ語圏・ドイツ語の歴史の中でどのような位置付けにあり、どのような役割を担ったのかについて考察する。具体的には、スイスドイツ語のドイツ語史における位置付けを、ロマン派と同時代およびその前の時代の思想潮流、文化的背景など、より大きな脈絡の中で明確にするために、次の2点を軸として研究を遂行した。

- 1) 18世紀スイスの文学者であるヨハン・ヤーコプ・ボードマーの著作から、言語についての思想、特に方言一般についての評価とスイスドイツ語に関する見解を分析
- 2) ドイツの文芸評論家・思想家ヨハン・ゴットフリート・ヘルダーの言語思想が、スイス方言辞典に与えた影響について比較分析

**キーワード** (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

{ スイスドイツ語 } { 18世紀の言語思想 } { ドイツ語方言学 }

**研究成果の概要** (図・グラフ等は使用しないこと。)

ドイツ語には、その歴史的背景から書きことばである標準ドイツ語の他に、話しことばとして日常生活などで今なお用いられる諸方言が各地に存在する。そのうち、ドイツ語圏スイスの各地域で話されるドイツ語方言は「スイスドイツ語」と総称される。本研究は、2015年度立教SFRの交付を受け、スイスドイツ語が、ドイツ語史の中でどのように位置付けられ、どのような役割を担ったのかについて考察した。ロマン派と同時代およびその前の時代の思想潮流、文化的背景など、より大きな脈絡の中でその位置付けを明らかにするために、ボードマー (Johann Jakob Bodmer, 1698-1783) およびヘルダー (Johann Gottfried Herder, 1744-1803) による言語に関する考察の分析を行った。ボードマーは、中高ドイツ語の再発見に大きく貢献した文学研究者であり、ロマン派思想にも影響を与えた。また、スイスドイツ語に関わる言語観を考察する上で、欠かせない人物である。具体的には以下の2点について取り組んだ:

- 1) 18世紀スイスの文学者であるヨハン・ヤーコプ・ボードマーの著作から、言語についての思想、特に方言一般についての評価とスイスドイツ語に関する見解を分析
- 2) ドイツの文芸評論家・思想家ヨハン・ゴットフリート・ヘルダーの言語思想が、スイス方言辞典に与えた影響についての比較分析

**1. ボードマーの言語に関する思想**

ボードマーは、文学理論研究者、翻訳者、戯曲・叙事詩の編集・執筆者であり、1698年にチューリヒ州グライフェンゼーに聖職者の息子として生まれる。ギムナジウム入学後、1718年に実用的且つ商業的な知識を収集するためルガーノおよびリヨンへ赴き、そこで文学に関する知識も身につける。イタリア人とフランス人作家らについてボードマーがもつ詳細な知識は、この早期の時代に遡る。1719年からチューリヒ州内閣官房に勤務し、1725年には代理司祭に、1731年にはコレギウム・カロリヌムのスイス史の教授職に就き、1775年まで勤める。ボードマーの文学上の交際相手としては、ゲーテ、ハイネ、ラバターそしてティッシュバインなどの文学者の名が挙げられ、ヴィーラントおよびクロップシュトックの両者はボードマーの支援を受けている。

文学の方向性についてのゴットシェート (Johann Christoph Gottsched, 1700-1766) との論争において、ボードマーは、ブライティンガー (Johann Jakob Breitinger, 1701-1776) とともに、後のロマン派思想に影響を与えるなど、ドイツ文学界において重要な役割を果たす。特に、中世文学の価値を再評価したボードマーの功績は大きい。ブライティンガーと共同執筆のものも含めたボードマーの作品全集は、社会に関する著作、歴史研究、古ドイツ語と新高ドイツ語のテキスト出版、戯曲、叙事詩、風刺小説ならびに批判的・美学的著作を含んでいる。主な著作としては、雑誌『画家論評 (Die Discourse der Mahlern, 1721-1723)』、その後表題が変更された『風習を描く画家 (Der Mahler der Sitten, 1746)』があり、ブライティンガーとの共著である。また、『文学における驚嘆すべきものについての批判的論考 (Critische Abhandlung von dem Wunderbaren in der Poesie, 1740)』、『シュヴァーベン公国からのミンネゼンガー収集、140選 (Sammlung von Min-nesingern aus dem Schwaebischen Zeitpuncte, CXL Dichter enthaltend, 1758-1759)』などが挙げられる。他に、ミルトンによる『失樂園 (Das verlorene Paradies)』の翻訳 (1732)、『パルツィファル (Der Parzival)』の改作 (1753) など手がかけている。

ボードマーについての研究は、ゴットシェートとの文学論争に目を向けたものが少なくない。本研究では、この文学論争の中でも特に言語思想に関する部分に注目し、ボードマーの著作から言語についての思想、方言一般についての評価およびスイスドイツ語に関する見解を分析した。ここでは、『風習を描く画家』における「ザクセンの言語裁判官について更に告訴する (Mehr Klagen über die sächsischen Sprachrichter)」を分析テキストとした。なお、この論文の表題にある「ザクセンの言語裁判官 (die sächsischen Sprachrichter)」が、ゴットシェート派を指していることは明白であり、この論文の背景には、1727年に始まり1760年代まで続くゴットシェートと2人のスイス人との論争がある。

この著作において、ボードマーの論点は、主に次の3点であることが見出された。1) ドイツ語の多様性: ドイツ語は多様であり、それは地域差および身分階級に起因している。2) 方言に優越はない——書きことば統一に対する提言: この多様性の基となる各地域方言に優越はないとし、書きことば統一において、各方言の独自性を評価し、どれかひとつの方言に統一すべきではないことを提言している。3) スイスドイツ語の豊かさを評価: スイス方言の豊かさをザクセン方言と比較して強調している。

## 研究成果の概要 つづき

### 1.1. ドイツ語の多様性

ボードマーはフランス語とドイツ語の書きことばの現状を比較することで、その違いについて論じている。ボードマーは、フランスにおける書きことばが、貴族と知識人が日常で用いていることばと同様であることに対して、ドイツの書きことばは、フランスのそれと全く別のものであることを指摘し、その理由についてボードマーは、ドイツでは、貴族、市民、農民といった身分階級の中での交流がないため、言語も共通であるはずがない、ということ論じている。ドイツ語の多様性は、地域差の他に身分階級にも起因していることを、ボードマーは述べており、そもそも人々が話すドイツ語の差異が大きいドイツにおける、その話しことばを基とした書きことば構築の難しさを指摘している。

### 1.2. 方言に優越はない——書きことば統一に対する提言

当時の時代背景にある、ゴットシェートにより提言された、ドイツ語書きことばの統一においてマイセン語（ザクセン方言）が主導権を持つことについて、ボードマーは疑問を呈している。ドイツ語圏の他地域で話されている方言とザクセン方言の間にどのような違いがあるのか、ザクセン方言が他の方言を上まわり得ないことを論じている。また、ドイツ語が地域および階級によって大きく差異のある言語であることを理由に、ザクセン方言を共通書きことばとして利用すべきではないと述べている。

### 1.3. スイスドイツ語の豊かさを評価

ここでは、スイスドイツ語の豊かさについて、ザクセン方言と比較しながら述べられている。ボードマーは、具体的な語彙を挙げ、スイス方言の書きことばの簡潔さを指摘している。この根拠として、ザクセン方言では schön werden というように werden を用いなければならない表現を、スイス方言では schönen 一語で表現することが可能であることが、挙げられている。さらにボードマーは、スイス方言の語彙の豊かさを、ザクセン方言では用いられない古い語彙を有していることに求めている。

## 2. スイス方言辞典にみられるヘルダーの言語思想

19世紀初期に編纂されたシュタルダー（Franz Joseph Stalder, 1757-1833）編スイス方言辞典（1806, 1812）にみられる言語に関する見解と、ヘルダーの言語思想との関連性を明らかにした。同時代における言語をめぐる理論の流れは、上述におけるボードマーの言語思想をはじめ他にも多くあるが、ここでは、方言そのものを高く評価しているヘルダーの思想に注目し、分析を行った。その結果、次の3点において、その関連性を見出した：1) 言語一般評価、2) 方言一般評価、3) スイスドイツ語に関する言語的見解。

言語一般評価に関して、ヘルダーは、言語と民謡の関係性について説いており、民謡は、その土地の言語の宝であり、歌を通して言語を維持し、後世に伝えてきたと述べている。この点についてシュタルダーは、スイスの古い書きことばは民謡の中に残っているとし、スイスの各地域の民謡を収集し方言辞典に掲載することで、方言を、民謡を通して紹介することを試みている。つまり、その言語思想には、ヘルダーの言語思想の影響が見出される。方言一般評価については、ヘルダーは、方言は国民の宝であると称し、言語は方言において豊かであると述べ、とりわけ方言に祖先の古いドイツ語の美しさが残っているとし、方言そのものを高く評価している。同様にシュタルダーも、方言は大きな財産であると述べ、方言が真にドイツ的な表現であるという理由で、自身の方言辞典がいかにか有用であるかを述べつつ、方言の価値を見出している。この点においても、シュタルダーがヘルダーの方言評価を受け継いでいると考えられる。最後に、スイスドイツ語に関する言語的見解に関して、シュタルダーは、「アルプスとヘルヴェティアの誇りによって他国から隔てられているので、そもそもスイスでは古い流行と習慣がより長く保たれているように、スイスの書きことばも古いドイツ語の素朴さにより忠実なままであった」というヘルダーの書きことばを引用している。さらにシュタルダーは、ドイツ語書きことばにおいて失われてしまった古いドイツ語の書きことばを保持している、というスイス方言の古さを強調していることから、ヘルダーの見解を継承しているといえる。

グリムをはじめとする方言についての学術的な研究がはじまったとされる19世紀初期よりも前に、上記のようなヘルダーの言語思想が存在したこと、そして、スイス方言辞典は、そのヘルダーの思想を受け継いだ方言辞典の先駆けであることを明らかにした。

※この（様式2）に記入の成果の公表を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差し控え期間等を記入した調書（A4縦型横書き1枚・自由様式）を添付すること。

**研究発表** (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

① 雑誌論文

Ayako Miyajima: Franz Joseph Stalders Schweizerisches Idiotikon (1806/1812) vor dem Hintergrund von Herders Aufwertung des Dialekts

[日本独文学会 2015 年度語学ゼミナール論集 (掲載予定)]

④ その他

1) 「ドイツ語史におけるスイスドイツ語——ボードマーの言語に関する思想——」

[立教大学文学研究科ドイツ文学専攻春学期コロキウム 2015 年 6 月 26 日]

2) Ayako MIYAJIMA: Schweizerdeutsch – ein sprachhistorisches Relikt? Schweizerische Idiotika (1806 / 1812) von Franz Joseph Stalder und der metasprachliche Diskurs im 18. und 19. Jahrhundert.

[日本独文学会 第 43 回語学ゼミナール 2015 年 9 月 4 日～7 日, 京都]

3) Germanistische Linguistik: Forschungskolloquium Herbstsemester 2015 Objektive und subjektive Sprachräume

[スイス・フリブール大学 コロキウム 2015 年 11 月 6-7 日, フリブール]